

ALWAYS 三丁目の夕日

2005(平成17)年10月3日鑑賞(東宝試写室)



監督・脚本・VFX＝山崎貴／出演＝堤真一／薬師丸ひろ子／小清水一揮／吉岡秀隆／小雪／須賀健太／堀北真希／三浦友和（東宝配給／2005年日本映画／133分）

……時代は昭和33（1958）年。舞台は東京。今、東京タワーが建設中で、今年中には完成だ。そして、昔懐かしい下町の風景……。と言っても、私のそれは松山の風景だが……。しかし、私の気持はこの映画に登場する2人のチビッコ主役と同じ小学〇年生。テレビ・洗濯機・冷蔵庫、これが「三種の神器」だが、あなたのお家では何が一番早かった……。貧しかったけれども、何かが豊かで夢があったあの時代。この映画で2つの家族(?)が織りなす昭和の物語は感動がいっぱい！ 親から子へ永遠に語り継ぎたい夢のような昭和の時代に乾杯しよう……。！

鈴木家は前向きな昭和の象徴！

この映画の主人公の1人鈴木則文（堤真一）は、戦争体験をもった人物らしいが、今は、自動車の将来に夢を託し、自動車修理の仕事に誇りと情熱をもって取り組んでいる。そしてそれを一生懸命やれば、豊かな暮らしを実現できると信じている、あの時代の典型的な1つのタイプ。もっとも、その「私の強さ」はちょっときつすぎるかも……。？

その妻、鈴木トモエ（薬師丸ひろ子）がこんな夫を支え続けていることは明らかで、彼女はいわばフーテンの寅さんの妹で博に嫁いでいる「さくら」のようなもの……。？ そしてその一人息子が一平（小清水一揮）で、野球やプロレス大好きなあの時代の典型的な小学生。輪ゴム付の模型飛行機を飛ばしたり、フラフープで遊んだり、ちょっと私の小学生時代に比べると生意気(?)だが、気持は全く同じ……。？

もう一方の主人公は売れない小説家とガキ、そして美女!

この映画のもう一方の主人公は茶川竜之介（吉岡秀隆）と古行淳之介（須賀健太）、そして石崎ヒロミ（小雪）。ただし、この3人は家族愛いっぱいの鈴木家の3人と違って、何の縁もゆかりもなく、それぞれ全く赤の他人同士!

東大卒で一流の小説家を目指し、芥川賞の最終選考に残ったこともあるというのが竜之介の自慢だが、今は文学雑誌への連載が叶わず、やむなく三流少年雑誌『月刊冒険少年ブック』に児童小説「少年冒険団」を連載して食いつないでいる状態。ちなみに竜之介が住み、経営している(?) 駄菓子屋はおばあちゃんから引き継いだもの……?

そんな竜之介のもとに石崎ヒロミの策略(?) によって住みつくようになったのが古行淳之介。石崎ヒロミの友人が生んだ子をちょっと預かってくれと連れてきたのは、石崎ヒロミが元勤めていた劇場の支配人（益岡徹）。劇場からやっと逃げ出して、カタギの仕事として一杯飲み屋の「やまふじ」をはじめた石崎ヒロミにとって、子供を預かることなどは迷惑この上ない話だったため、うまくこれを竜之介に押しつけたというわけだ。

酔った勢いでオーケーと言ってしまった竜之介は、すぐ向かいの住人で、コトあるごとにライバル関係となっていた鈴木則文から「しっかり面倒みろよ!」と言われると仕方がない……? しかし、ひょうたんからコマとはこの映画の、この3人のためにあるような言葉……? 物語の展開につれて、次第にこの3人の気持は1つに……。それが、観客の涙を誘う1つの大きなポイント……。

あの時代、こんないい女がいたの……?

あの時代小学生だった私が言うのも変だが、あの時代の一杯飲み屋のおカミに、小雪扮する石崎ヒロミみたいなスタイル抜群のカッコいい女がいたの……?

戦後の豊かな食生活と洋風生活の中で育ったからこそ、現在パナソニックのテレビ「VIERA」のコマーシャルで悩ましげな肢体を見せる小雪のようなボディが誕生したのであって、昭和初期の軍国主義ニッポンの時代に生まれ育った女性に、あんなに脚が長くて背の高い女がいるはずがない……? もっとも、あの時

代には全然そぐわない(?)八頭身スタイルは別にして、石崎ヒロミの気持は純粹な日本人そのもの。というよりも映画の中のセリフで語られているように、今さら「娘の身売りでもあるまいし……」を地でいく、ちょっと古風で不幸な女をこの小雪が好演!そして主人公の1人である茶川竜之介との間に幸せをつかもうかという瞬間に訪れたある事態に対する彼女の決断にも注目を……?

『ああ上野駅』

「どこかに故郷のかおりをのせて、入る列車のなつかしさ……」「就職列車にゆられてついた……」。これは、井沢八郎が1964年に歌って大ヒットした『ああ上野駅』の1番と2番の歌詞のサワリ……。

この映画には、この歌詞そのものの、あの時代の、東北からの集団就職で上野駅についた「金の卵」の1人である星野六子(堀北真希)が登場する。社長秘書になれるという夢を抱いて上野駅に降りたった六子には、パリッとしたネクタイ・スーツ姿の鈴木オートの社長、鈴木則文が出迎えに来てくれていた。しかし、彼女を招いたかみえた、運転手付きの黒塗り高級車は別の社長様用だったので、鈴木則文社長が自ら乗り込んだのは、オンボロの三輪車。これがダイハツの「ミゼット」というあの当時有名な車……。こりゃちょっと話が違うのでは……?

セット比べは?

この映画の成否のカギは、昭和33年という時代のニッポンの風情、情緒そして建設中の東京タワーと主人公たちが生活している夕日町三丁目のまちなみを再現できるか否かにかかっている。しかして、スクリーン上に登場するそのまちなみの見事さにはビックリ!

東京タワーや上野駅、そして蒸気機関車などには、ふんだんにCGやVFXの技術が使われているが、同時に夕日町三丁目のまちなみの再現のために、ハリウッド映画みたいなスタジオセットが約30人が働いて1カ月くらいでつくられたらしい。鈴木オートの前の道や子供たちが遊ぶ路地はもちろん舗装なしだが、路面電車が走るメインストリートは舗装され、自動車の行き来も頻繁。ホントに懐かしい風景だ。これが、昭和20年の敗戦から13年後の昭和33年=1958年の東京……。

この東京のまちなみの映像を観て思い出したのが、1週間前の9月26日に観た『オリバー・ツイスト』（05年）に登場する、1837～1839年のロンドンのまちなみ。これは、ロマン・ポランスキー監督が80億円という膨大な製作費を投入した作品だが、ロンドンのまちなみの再現にそのかなりの費用を投入しているはず。昭和33年＝1958年より100年以上前であっても、ロンドンのまちの建物は耐火建築物構造。すなわち、石とレンガづくりの堅牢な家が多く、道路だって石畳の立派なもの。

しかしその「暗さ」はどうしようもなく、その点では、昭和33年の開放的で明るい夕日町三丁目のまちなみの方が魅力的……？ かけた費用はケタが違うだろうが、映画のセットとしてはこの程度で十分……？

大騒動も幸せのうち……？

友人の子供の淳之介を竜之介に押しつけた石崎ヒロミは、さすがに良心の呵責からか（？）、竜之介の家を訪れてライスカレーをつくってやったりしてちょっとした心づかいを……。そんな時に発生したのが、鈴木オートにおける鈴木社長と労働者六子との間の身分詐称をめぐる大騒動……？ ちょっとしたペーパー上の記載が原因となって文字どおり物理的な大騒動となり、竜之介家はそのとばかりを……。

あの時代、各家庭のプライバシーなどはあってないようなもの……。それがあの時代の何とも言えない香りであり、今風にコミュニティなどと言ってしまうとかなり違う感じが……？

テレビ、冷蔵庫に見る人間模様……

映画の冒頭に上野駅が登場し、続いて鈴木社長自ら運転するミゼットが登場！そして、メインストリートから路地に入り、到着したのが、六子期待の「ビルディング」ではないものの、鈴木オートの鈴木社長自慢の木造二階建ての職住兼用のわが家だ。現在、長男一平が毎日気にしているのが、テレビの到着日。しかし、母親のトモエに聞いても、「電気屋が順番待ちだから、いつ来るかわからない」というつれない返事……。

鈴木オートは、オーナー社長の則文が夢と希望を持って一生懸命働いているだ

けあって、ご近所での「豊かさ競争」ではトップを走っている様子。その証拠に、鈴木オートにテレビが到着した日は、「力道山の空手チョップの日」と重なったこともあって、そりゃ大変。近所の人たちが大勢集まった鈴木家の居間は、突然映画館、いやプロレス会場にサマ変わり……？

他方、新型の電化製品が登場すれば、それまで既得権益を保っていた人たちの退場も……。その1つが冷蔵庫。今ドキの若者は知らないだろうが、冷蔵庫とは単なる冷蔵庫ではなく、正式名は電気冷蔵庫。つまり、電気で冷やす魔法の箱なのだ。すると、それが無い時代は、どうしていたのか……。それは、上部のBOXに大きな氷の固まりを入れて、その下のBOX内のものを冷していたのだ。当然、これは「電気」ではないから、毎日あるいは数日毎に氷の取り替えが必要。そこで繁盛していた商売が、氷屋だ。電気冷蔵庫の登場によって、この旧式冷蔵庫(?)は廃棄物になるとともに、それまでの氷屋はその職を失うことに……。

これもあの昭和の時代に現れた1つの避けることのできない社会現象であり、構造改革の1つ……？

「三種の神器」の優先順位は？

テレビ、冷蔵庫と並んで豊かさ象徴する「三種の神器」が電気洗濯機。この映画には洗濯機にまつわる物語は登場しないが、鈴木家でもきっと、三種の神器のうち何を一番最初に購入するかについての家族会議が開かれ、そこでは激論が展開されたはず……？

鈴木家は自動車修理工場だから、油にまみれて仕事をしなければならないのが宿命。そうすると、何よりもありがたい電化製品は当然洗濯機のはずだ。したがって鈴木家では、テレビ騒動に先立って、きっと洗濯機を購入していたに違い無い……？

昭和33年当時の松山市にあったわが坂和家でも、洗濯機の購入が第1優先順位だった。当時の洗濯機は、もちろん乾燥機付きなどというものではない。もっとも、乾燥機能はなくとも、絞り機能はあった。つまり洗濯の終わった衣類は、「手動」で逆方向に回る2つのローラーの間を通過させることによって、絞るわけだ。これでも両手で大きな濡れた衣類を絞ることに比べれば、大変な進歩で、

いわば突然サルから人間になったようなもの……？ わが家は、鈴木家における一平君のように、小学生の時から自宅にテレビがあるなどという生活は望むべくもなかったため、隣の電気屋さんへ行って、週に1回か2回だけテレビを観せてもらっていたもの……。テレビには夢があったが、冷蔵庫の登場は、これぞ生活をバラ色に変えるホントに「魔法のハコ」の登場だった……？

子供には子供の世界が……

竜之介のおかげで、住むところと食事にありつけ、小学校へも通うことができるようになった淳之介は、一平たち近所の子供たちとすぐ仲良しに……。とはいかなかったよう……？ それは、淳之介が遊ぶことに夢中な一平たちのような普通の小学生ではなく、文学少年だったから……？ 自習時間になれば教室の中で「野球」をやって遊ぶ一平たちに対して、いつも鉛筆とノートを持って何かを書いている淳之介は、「ガリ勉野郎！」と言われて疎外されていた……。ところがそれが一変したのは、淳之介の書いた「空飛ぶ戦艦」という小説(?)を一平たちが読んだため。「こりゃ面白い！」と一平たちはその物語のとりこになってしまったのだ。

一平と淳之介の大冒険

そんな一平と淳之介は、今日は2人で路面電車に乗って高円寺まで大冒険に……。お金は片道分しかないが、帰りはきつと「淳ちゃんのお母さんが何とか出してくれるよ」という一平の甘い見通しの下に……。そう、偶然に、母親が高円寺にいるらしいという話を聞いた淳之介が、一平の勧めもあって2人で高円寺に向かったというわけだ。さて、その結末は……？

夕方になっても、さらに辺りがまっ暗になっても家に帰って来ない一平と淳之介に、鈴木家はもちろん、淳之介の方も竜之介とヒロミが大騒動。「変なおじさんの姿を見た」というトモエの発言によって、さらにその不安は広がり、「こりゃ誘拐だ」ということに……。そんな中、やっと姿をあらわしたのが、疲れ果てた2人……。その淳之介の頬には、一平に対する則文のビンタよりも早く竜之介のビンタが……。こりゃ一体なぜ……？

この2人の大冒険が結果として無事に終わったことについては、つぎのあてた服など嫌だと駄々をこねていた一平のセーターにトモエが縫い付けた「お守り」が大きな効用を……これぞ母親の本当の愛……？

昭和33年も、春から夏へ

昭和33年の春が過ぎ夏が来ると、六子の鈴木オートでの仕事ぶりも板についてきた。他方、竜之介の仕事のダメぶりはあいかわらずだが、淳之介に文筆の才があることが判明したため、大人（竜之介）による子供（淳之介）の作品の「盗作騒ぎ」を起こしながらも、竜之介と淳之介の関係は、次第に改善（？）し、信頼関係が……。当初はあれほど迷惑がっていた竜之介だが、ともに小説家として（？）の熱い血が流れていたためか、竜之介と淳之介は今や意気投合……。この男同士の結びつきのストーリーは結構面白く、かつ感動モノだからじっくりと……。そして、そんな竜之介の家の様子を時々見に来ていたのがヒロミ。赤の他人同士ながら、今や、この3人は結構いい雰囲気……。

しょうもないゴロ合わせの妙は……？

いうまでもなく、この映画に登場する一方の主人公である小説家組（？）の竜之介と淳之介は、あの有名な芥川龍之介と吉行淳之介のしょうもないゴロ合わせだが、同じようなゴロ合わせとして登場するのが、友情出演の三浦友和扮する宅間史郎。彼は子供たちからアクマ先生と呼ばれ、恐れられている近所の医者だが、なぜアクマ先生と呼ばれているのだろうか？ 小さな子供が医者を嫌がるのは、おおむね太い注射をうたれるから……？

そう、ある事情で妻と子を失ったこの宅間氏はホントはやさしく子供想いの医者だが、太い注射をするのが、ひょっとして趣味……。いやいや、そんなことはない、映画の中には、石崎ヒロミが経営する一杯飲み屋に集まる人たちのコミュニケーションによって事態の進行を左右するシーンが時々描かれるが、この宅間先生のエピソードもその1つ。紳士的でやさしい宅間先生が、実は竜之介と石崎ヒロミから頼まれて、後述のサンタクロースに扮していたのだが、その役目を終えた宅間先生は今日は石崎ヒロミのお店で上機嫌……。そこで、妻子のおみや

げの焼き鳥を注文して、これを自宅へ持ち帰った宅間先生は、やさしい妻と父親の帰りを待っていたかわいい子供から喜ばれ、大いに幸せを満喫……。えー、宅間先生って妻子を失い、今は独身生活ではなかったの……？

何でも、高学歴で利口な人ほど、あの昭和の時代にはまだ時々出没していたという狸にバカされるというから、ひょっとして……？

あの時代、シュークリームはお宝……？

どんな時代でも、どんな家庭でも、子供がいればいつか医者が必要になることが……。大冒険から帰った後、熱を出した一平もそうだったが、鈴木家の六子の場合はずっと傑作……？ 六子が急に倒れこんだため、ビックリした則文やトモエが宅間先生の診察を依頼したところ、判明した病名は「食あたり」。すると、その原因は何か悪いものを食べさせたせい……？ 映画の中で明らかになるこの事件(?)の真実は、私たち団塊世代の人間なら誰もが小学生の頃に思いあたる、おいしい物に対するこだわりのせい……？

そう、原因は鈴木家のもらいものの超大切なシュークリーム。すなわち、もらいもののシュークリームをトモエが大切に氷ボックス式の冷蔵庫の中にしまっていたところ、次の氷交換の時までそれを忘れていたことが判明！ 「ああ、大変！」と大声をあげ、側に寄ってきた六子とともにそのケースを開けた2人。わずかの期待をもって、まだ大丈夫かもしれないと思って臭いをかいでみると、やはりどうもダメみたい……？ こんなことが一平にばれたらエライことになるため、トモエは泣く泣く六子に「六ちゃん、残念だけどこれを捨てといて」とはっきり言ったのだが、六子が食あたりになったところをみるとどうも六子は……？

「だって、シュークリームなんて、生まれてからまだ一度も食べたことがないんだもん……」という六子の弁解(?)は、昭和のあの時代の貧しさと夢の大きさを象徴する名セリフ……？ しかして、悪いのは六子か、それともトモエか、その判定は難しいもの……？

万年筆の思い出

泣かせるエピソードをひとつ紹介しよう。父親も母親も知らず、1人さびしい

思いで竜之介の元で生活していた淳之介には、贅沢をしたり甘えたりした経験がないのは当然。ある日、ある時、それを感じた竜之介は、サンタクロースによるクリスマスプレゼントにかこつけて、淳之介の欲しいものを聞き出そうとしたが、せいぜい淳之介が希望したのは鉛筆と消しゴム……。しかし、小学生作家である(?) 淳之介が丸めて放り捨てていた原稿用紙(?) に書いてあったのは、竜之介が愛用している万年筆の絵。そう、あの時代の小学生にとって、万年筆はあこがれの的。実は私もそうだった……。私にとって、小学生の時の万年筆の思い出とは……。それはさておき、このサンタクロースと万年筆のお話にはあなたが涙すること確実……。

生みの親かそれとも育ての親か……？

しかし、いつまでも父親不明というわけではなく、ある日ついに淳之介の父親と名乗る人物が登場するが、これが何と大金持ちの社長！

大人の竜之介はあくまで強がって、「良かったナ」と言いながら、無理やり淳之介をこの父親の車に乗せようとするが、年こそ違え2人の男同士の想いは同じ……。縁もゆかりもない他人同士のこの2人にも、今や血のつながった父と子以上の強い結びつきが……。生みの親かそれとも育ての親か、は難しいテーマ。こりゃ、この2人の名演技もあって、泣かせるよ……？

もうひとつ泣かせる話を……

泣かせてばかりで申し訳ないが、泣かせる話をもう一題。それは、鈴木夫婦による星野六子へのサンタクロースによるプレゼント。一人息子の一平は、当然サンタクロースが毎年訪れてくるものと考えていたが、六子はそうではない。東北の貧しい家庭に育ち、「口減らし」のために東京へ集団就職してきた六子にとっては、おおよそクリスマスプレゼントなどというものに縁がなかったのは当然。そんな六子に鈴木夫婦が贈ったクリスマスプレゼントは故郷への切符。お盆休みも田舎へ帰らず働いたのだから、せめて正月くらいは親に顔を見せてやれ、というやさしい気持の現れだった……。しかし六子の反応はイマひとつ……。出発当日になってもなかなか六子の準備は整わないばかりか、「帰ったら両親に迷惑をか

けるから帰らない！」と宣言し、自分の部屋に上がって泣くばかりの六子。そんな六子に鈴木トモエが見せた六子の両親からの手紙の束は……？ 実によくできたこんなストーリー展開に、あなたの目がまっ赤になり、顔がクシャクシャになること確実……。

箱だけのエンゲージリングも……？

前述の淳之介と一平の「失踪騒動」をピークとして、竜之介と淳之介との間に芽生えてきたのが父子の情愛……。そしてそれと同じように、竜之介と石崎ヒロミとの間には、ほのかな男女の情愛が……。作家のクセにそんなことにはとんと鈍くさい竜之介に対して、最初にヒントを与えたのは石崎ヒロミからだが、やっとそれに気づいた竜之介はいよいよ本格的なプロポーズの準備を……。そのためには先立つものが必要だが、残念ながら竜之介には手持ちの余裕資金などあるはずがない。そこで竜之介がとった方策は……？

そして、竜之介が石崎ヒロミに捧げたのは、中に指輪の入っていない箱だけのエンゲージリング。しかし、それに感激した石崎ヒロミは……？ プロポーズには金などいらん！ 愛さえあれば……。この、箱だけのエンゲージリングによるプロポーズは、今風に言えばあたかも「電車男」による「エルメス」へのプロポーズみたいだが……？

『カーテンコール』と並ぶ昭和モノの名作に拍手！

以上のとおり、この映画は心暖まるもので、11月上旬公開予定と決まった佐々部清監督の『カーテンコール』と並ぶ昭和モノの名作！ 『カーテンコール』は、『いつでも夢を』が大ヒットした昭和37年の時代だが、この映画の時代は、昭和33年。東京タワーの完成（昭和33年）、東京オリンピックの開催（昭和39年）、新幹線の開通（昭和39年）、大阪万博の開催（昭和45年）等々、あの昭和の時代の夢はデッカイものだった……。「古きをたずね、新しきを知る」という意味でも、平成17年の今、この2本の昭和モノの名作から、あの昭和の時代を今一度振り返って、勉強してみよう……。

2005(平成17)年10月6日記